SHINOBI







初めましてのかたもこんにちはの方も。
久しぶりの新刊を手にしてもらってありがとうMAXでつお。
今回は久方ぶりのジャンプ遡り咲きになります。
久しぶりに本誌＋アニメで萌え～～と叫べるジャンルに出会えました
砕蜂たんが健気で健気でたまらんです。
バレンタインとかしちゃうし夜一様が好きでたまらないんだね――
そんなソイたんがたまらなく愛しいですお。ハァハァ

とりあえずエロイ本を目指して精進しています。
手にとってくれた方々に感謝と萌えをこめて。

2008.2.28　高槻でした


……夜一様
起きてください夜一様
ん……
……どうした砕蜂？人が気持ちよく寝ているというに
申し訳ありません…でも、お風邪を召してしまいますから
？…………ああそうじゃの。


ええええっ!?
そうじゃ 砕蜂も儂の部屋で休めッ
……嫌か?
いえ、滅相もない ……でもその 訓練を終えた後で…汗が
じー
風呂どころか 夜着までお貸しくださる なんて
ああ、なんじゃ そんなことか
儂の屋敷にも 風呂ぐらいはある ……さ、付いて来い
私のようなものを 妹のようだと言って下さる だけで夢のようなのに…
夜一様 お風呂頂きました
ガラ

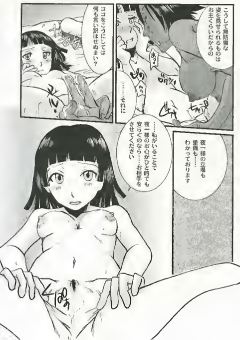

おお、あがったのか
砕蜂
ドキン
ずいぶんと
長風呂なんじゃの
あ……あ
申し訳…ありません
よい別に
責めている訳ではない
ほれ、そんなところに座って
いたら湯冷めするぞ


ほれ
早くせんか
ひやっ
お
意外と積極的
なんじゃの
グイッ
も、申し訳……ッ
まあ良い
謝るなと先から
言っているじゃろう
2、3 聞きたいことが
あるんだが
聞いてもよいかの？砕蜂
夜一様…
あっ…



あれほど鍛錬をしていておるのに
肌は柔らか…じゃな
ひゃうッ
お主は好いた男は居るか……？
もし、同じ隊の者と好きおうてるのなら諍いの種を長の儂が肯く訳にならぬからの
あっ
のう…砕蜂？
夜一様
傍に居るだけでどうにかなってしまいそうなのに
いいえ、私は…身も心も夜一様へ忠誠をちかった身
恋愛なぞ、そんな戯言…心にかけらも思ったこともありません
ほう……ならば身も、というのは此処や
んぅ
此処も、入るか？
あっ
夜一様の指が……そんなところに触れるなんて
は……はい


ほう……
感じやすいのか
もう濡ってきているぞ？
夜一様……
どうしてこんな…こと
どうしてっと聞かれてものう
……したくなったでは
だめか？
……お前の此処を掻き混ぜる
相手も居らぬのなら
不都合はないであろう？
そ、そんなっ
私みたいなものが
よ…夜…さま…と
何を言ってる
お主だから…じゃ
……あれ程妹のように
愛でているのに、
つれないぅ



こうして無防備な姿を見せられるものはお主くらいだからの
あっ
んっ
……それに
ココをこうにしては何も言い訳はせぬまい？
夜一様の立場も重責も……わかっております
……私がいることで夜一様のお心がひと時でも安らぐのなら……お相手をさせてください


ニヤ
よし…これで
言質は取れた
ようじゃな
えっ
ようやくこれ本来の
使い方が出来るのぅ
スチャ
輪遊……っ夜一様の……
斬魄刀ですか、それはっ
いや……
開発局の知り合いが作った
斬魄刀もどきじゃ
拷問・尋問用に開発
……したらしいがどうも
上手くいかなくての
面白い仕掛けだから
譲ってもらった
起きよ
飛娘
刀身が……煙に
こやつも斬魄刀と
同じように使用者を選び
霊力に比例して姿を変える
まあ…
用途は限られておるがの


まあ
見ておれ
くぱぁ
……は
夜一……様っ
あんな太いものが…
夜一様の中に収まって
いくなんて
んあ♥
ズ!!

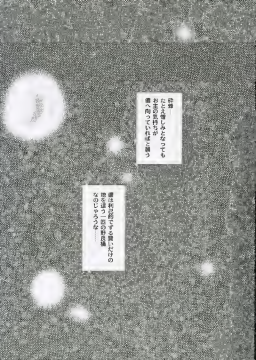

刀が……
形を変えていく
どうじゃ、砕蜂
これがこの刀の能力じゃ
持ち主の霊力を吸い上げ
主の心を具象化していく能力
なるほどの…ぉ
体内の霊絡を直接
吸い上げるとこうも
大きくなるのか
おまえの奥まで
これで操らせて
くれるかの？
うあっ
ハッ……
ひぁあぁあッ


んぅ
凄い濡れよう……じゃの
此れを見てお主も興奮したか？
砕蜂
ちがいます
……夜一様
私は……夜一様のお傍に居るだけでこうなってしまうのです
ふぁッ
イッ…あああッ
……はい
私は夜一様に
凡てを捧げた身
どうぞ存分にお験しを


そうであったな…
なら遠慮はすまい
ズヴ
初めてなのに
こんな素直に飲み込み
おって…
…おお…刀を通して
お主の締め付けが
伝わってくる
ビクウゥッ
あ♥
ズプゥ
くぅ♥
…砕蜂
お前の心なぞ
とっくに承知の上じゃ
憧れ、憧憬、思慕
そんな言葉すら
当てはまらぬ…
まるで神へ拝する者の瞳
ヌプ
ジュプ
ズッ
ズズ
ヒィッ♥
ア…あまっ♥
イッ

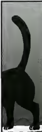

あぁっ
はっ
聖にも邪にも
わしの心次第で……
……ん？
寝てしまったのか


砕蜂 もう近い未来 儂はお主の前から 姿をけすだろう
それをわかっていながら 初めての痛みを教え
体を重ねて 儂はお前に何を刻もうと しているのだろうの


砕蜂――
たとえ憎しみとなっても
お主の気持ちが
儂へ向っていればと願う
儂は利己的でずる賢いだけの
地を這う一匹の野良猫
なのじゃろうな……

サカリ





日長一日。下手すれば二・三日時間の流れが遅い。商店の敷居を跨ぐ客もまばらな時期。浦原喜助は、持て余し気味な体力と気力をどう拡散しようか思案していた。

最近は尸魂界関係の、急な仕事もめっきり減った……。

店長業務はそれほど難しい事はない……そう。あちらでの自分の仕事量から換算すれば、遊んでいるような物である。

従って、当然の事ながら、所謂余りある気の暴走を有る程度まで抑えておく必要があるのだ。

「……なんか……こう。」

すっかり片付いてしまったちゃぶ台の上の帳簿に、頭をつけて呟く。

また、地下に潜って消耗して果てるか……それとも……。

傍らに置かれた手摺りの炭を、さかさかと弄びながら……。

「……すっごいタイミングっすねぇ……」

頭を机に伏せたままで、縁側の直ぐ下辺りにそう問いかければ、黒い闇を切り取った様な、極小さな生き物が遠慮も無しに、畳に飛び上がって来た。

「まったく、何時来ても暇そうな事だの」

「心外っすね〜。こう見えて結構忙しいんですよ、アタシ」

「どこら辺がじゃ？」

黒いビロードの様な、しなやかな肢体が伸びをしながら、喜助の直ぐ傍の円座に、女王様の様にちょこんと腰を落ち着けた。猫――である。しかし、喜助と対等に、否それ以上に横柄な口調で会話は進む。

「いろんなトコ♥♥♥」

黒い艶やかな体毛に、何時もの様にゆっくりと掌を押し当て、項から背中へ。柔らかく、その細い骨格までを確認するかのように――……。

「おおかた――……部分的にじゃろ……？」

「――知りませんよ」

喜助の指が、背中から徐々に更に下方へと移動し、それ自体が軟体動物の様な動きを見せる、親指ほどある太さの尻尾の付け根に到達すれば、可愛らしい声で鳴きもする。

「一度いい。――……と。喜助はその本物の猫の様な姿を愛でる。

「――ん」

黒い肢体がびくりと揺れ、金の瞳が細く細く眇められた。無意識だろうか？付け根から尻尾の先へと悪戯を仕掛ける喜助の指に、その尻尾は絡み、はたはたと打ち付けられ――……。

「――……さっさと素直にならないと」

喜助はそろりと猫の上に覆い被さるように移動し、然程大きくも無い獣の前足を一纏めにして、無造作に引っくり返した。猫の瞳に初めて怯えが生じ、四肢全ての指から、今まで隠されていた鋭利な爪が、剥き出しになった。くくく……と。声を忍ばせて含み笑いの喜助に、威嚇の意の唸り声を放つ。しかし拘束された手足を掴む手は緩む事も無く――。簡単に届いてしまう腹部を、指先だけで撫で回しながら、薄い色合いの瞳が金の瞳を覗き込んだ。

「……――このまま、ぶち込んじゃうっスよ？」

「ひっ……!?」

耳元で囁かれた低い声色は、何時もの喜助ではなく、明らかに欲情して高ぶった男のそれで、長々と伸ばされた状態で拘束されていた猫の体は、大きく跳ね上がった。喜助の指は、あらぬ箇所まで弄くり始めていて、獣の体であっても、内からぐずぐずと熱い欲が生じ始めていたのだ。その指が、小さな性器を何度も何度も撫で摩る。

「い……嫌だっ！」

絹を切り裂く様な声が、黒猫の切り裂かれた形状の口から発せられ、それと同時に黒い肢体がドクンと脈打った。

「なんだ、アタシはどっちでも良かったのに」

笑う男の目は昏く、半分は本気の光を宿していた。元々が学者肌の男なのだ。異種の交配等に付いても、過剰な研究意欲はあるに違いないのだ。黒猫は意を決して我が身に施した呪術を解いた――。

「……長い指だ・」

「痛い」

術の解法は他の数秒で終わってしまうのだ。その間猫の小さな体躯から、大人の妖艶な肢体へと変貌する様は、何度見ても感嘆に値した。

今喜助の体の下に組み敷かれている、褐色の肌は紛れも無く、幼い頃から数え切れぬほどこの胸に抱いた、四楓院夜一の姿であった。

「ずいぶん長いこと」

「!?」

頭の上で組んでいた両腕の、伸ばされた肘裏をぺろりと舐め上げれば、跳ねる肢体。つつ――――と、唾液を十分に含ませて内側の柔らかい皮膚を中心に向かって這う、喜助の舌……。その逆らえ切れない動きに、夜一の顔が歪む。

「――っ」

先刻刺激された下肢が、既に準備の整った状態で放置されているのだ。夜一は既に限界を振り切っていた。その熟しきった肢体が夜衣のまま喜助の腰に押し当てられ、先へ込まれた布越しの秘裂が既に濡れている箇所にむず痒い刺激を与える。それが欲しくて、夜一は自身を伸び上げて下肢を、喜助の腰に絡み付けた。

「オネダリっすか……？」

大きな胸の膨らみの先端で、喜助がひっそりと嗤く。唾液を垂らされた乳首に熱い吐息が掛かり、なお一層硬く立ち上がって快感を主張する。喜助の右手が大きな乳房を下から掬い取るようにして、回転させるように大きく揉みしだいては、上に持ち上げる。宝を取るかの様な行為に、最初は恐れを抱いていた。その喜助の動作のお陰もあるのか、夜一の胸は、その華奢な体躯とは不釣合いなほどに、大きく豊かに成長を遂げた。そして、その先端は夜一の、敏感なスイッチの一つでもあった。

「焦らすなっ」

「もう駄目？」

意地悪く笑う喜助。夜一の大きな瞳の真正面につい顔を移動して、手は拘束を解き、自由になった細い手首を取り、自らの股間に導いていた。布を押し上げて主張する熱を布で感じて、夜一の瞳に熱が篭った。この男が欲しい――――と。欲望が理性を打ち砕くのは、この状況であっては、いたって簡単な事であった。

「……ん」

喜助の腰に絡めた下肢を解き、夜一は喜助の肩を押し、彼を仰向けに体勢を入れ替えた。

「…………ん」

喜助の下肢に下がり、その過程で夜一自ら緩めた着衣を、剥ぎ取るように脱がせる。濃緑の着衣の下ではしっかりとした筋肉が付いており、見掛けよりも骨格の太さがあると分かる。夜一はその体躯の肩の辺りに、軽く噛み付いてやった。性欲が高まれば、その腹筋辺りは意識に緊張を高めるから、その痛みを伴う刺激は喜助の劣情を買った。

「引っ掻きは無しっスよ」

やわやわと咬みながら下へ移動する夜一の顎を、喜助の手が優しく撫でた。直ぐに生い茂る繁みの中に鼻を埋め、久方ぶりの男の臭気を堪能する。ぐりぐりと根元を刺激すれば、見下ろしていた喜助の表情が僅かに歪む。既に自分と同じように濡れそぼった先端に形の良い唇を押し当て、上目使いに喜助を見上げ、ゆっくりとその熱い塊を口内へと頬張った――。

「――くー」

先端の丸い部分を舌先で丸く舐め、カリの段差の小刻みに探る。軽く立てられる歯が鋭い無所を、容赦なく暴いてゆく――。上半身を起こし、肘で体を支えながら、夜一の行為を余すことなく眺める喜助。弱点を熟知しているのは、お互い様だった。夜一の唇がすぼめられて肉芯を飲み込み、引き抜く。見え隠れする生々しい色合いは、夜一の秘所と大差ない物だった。

「ん――…むふ、ん」

夜一の口内は熱く、吸い取る行為を繰り返される為に、喜助は必要以上に、腹に力を込め気をやらぬよう耐えた。体液を搾取しようとする夜一に、排尿にも似た感覚が生じて来た所為もあって、尚更喜助は快感となるのだ。それと感極まって、夜一は右手を自分の秘所へと滑り込ませ、自らを慰め初めてしまっていたのだ。強烈なビジョンが、喜助の脳内を焼く。

「んっ・・・」

喉の更に奥、肉壁に突き当たった感触に、喜助がとうとう両手を夜一の頬に掛け、強引に股間から引き剥がした。

「……!?」

糸を引く唇にむしゃぶり付きたかったが、切羽詰まった疼きが最優先であった。其の侭、夜一の体を押し倒し、膝に掛けた手を無理やり左右に押し開いた。殆ど抵抗もなく開かれた下肢は、しとどに濡れそぼり蜜を溢れさせていた。喜助は指先で、繁みに見え隠れする、切れ込みの中の芯を弄った。粘液で濡れた肉芯は、小さいながらも、既に大きく硬く変貌を遂げて、喜助の指先に刺激されて、ぴくぴくと魚の様に肢体を跳ね上げた。ぬるりと更に奥に移動し、丸いなだらかな隆起の奥の、蜜を湛えた無所へと先端を滑り込ませた。

「――あ」

「解す事も無いっすね――。」

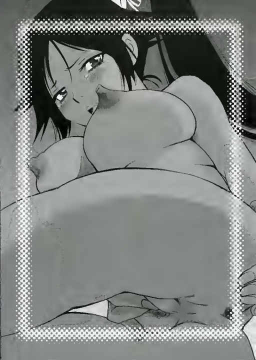
ゆるりと回転させ、更にもう一本滑り込ませれば、夜一が背中を歪らせて鳴く。肉壁は二本の指に吸い付き、乳暈に抜き差しするとどろりと蜜が溢れて、後孔を滑り形の良い双丘へと流れる。

「相変わらず淫乱――」

「早く――、…喜助――っ」

抜き差しする指の動きに、夜一の腰がゆらゆらと揺れ始めていた。

指の付け根まで押し込み、更に増やした三本の指を意地悪くばらばらと中で動かせば、腰を突き出す仕草までしていた。指ではないもっと奥底まで貫く、熱い雄を求めて、人間の姿の猫



は尚更下肢を大きく広げて行為を強請った……。

「――何が欲しいか言ってごらん？」

「知ってる……くせに……」

「言わないと、ココまでっスよ」

「くっ！」

「ね……言って？」

恥辱に頬を赤らめ、ふるふると睫毛を震わせる夜一を、喜助は音を立てて掻き回す。開け放たれた障子から、まだ明るい世界が見える。

その世界に陰猥な水音が、容赦なく響き渡っていた……！。

高まった夜一の下肢がびくびくと跳ね、焦り兼ねたように見開かれた瞳は、やがて、喜助に縋るように向けられた。

「お――おちんぽを――夜一に頂戴……？」

屈する事の無い筈だった褐色の肌が、喜助の雄を求めた。

その夜一らしからぬ、余りに稚拙な表現に、喜助の背筋がざわりと鳴る。黒い部分の血が、蠢き出すのが判った。

問う暇も与えずに、乱暴に悪戯していた指を引き抜き、臍まで反りたった雄を、夜一の中へと付きたて秘所の最奥を突いていた。

「あう……――んっ・ああ――」

「いい？　ねぇ……いい？　ココ？」

回す様に中を抉れば、角度の変化に追いつかない夜一が激しく喘ぐ。

熱い内壁が、うねうねと喜助の雄を飲み込もうと蠢く。

「駄目―駄目、あああんっ!!」

「当たって……る？　こんな……に浅かった？」

「ひう……――ん」

激しい律動と、入り口付近へのモドカシイ刺激を繰り返されて、

夜一は、あられもない声で嬌声を上げさせられていた。喜助のこんな行為に、尚更体の奥が高まる自分に驚きながらも、その惜しげもなく与えられる快感をただがむしゃらに傍受していた。奥底の柔らかい壁に何度も押し当てられる、喜助の先端を思うだけで、また新たな蜜が止め処もなく溢れ出すのだ。揺さぶられながら、脳内に霞が掛かり始めたのは頂点にたどり着く兆しで、喜助の動きも、まるでそれを理解している様に、次第に動きが単調でいて、激しいものと化していた。

激しく揺さぶられ、呂律の回らなくなった夜一が、半開きの唇を何度もぱくぱくと開閉しながら、絶叫した。

「ああっ！――イク……イクっ!!　いっちゃうーっ！」

「イケ！　いっちまえっ!!」



「あ　あ　ああ――――っ!!」

「く!・・…はっ――」

絶叫と共に、激しく痙攣しながら絶頂に上り詰めた夜一の中で

キツク収斂した内壁に搾り取られるようにして、喜助も最奥に白濁を吐き出していた。まるで搾り込まれる強さのそれに、さしもの喜助も堪える事は出来なかったのだ。数度に分けて放出される性が、夜一のイッた直後の、敏感な底に叩き付けられて、その度に褐色の肢体がびくびくと震えた。

「――っ……はー。」

汗で光る喜助の体が、やがて夜一の胸に重なって落ちた。どくどくと互いの心臓の鼓動が感じられて、そのどちらもが早鐘の様であったから、何となく笑ってしまっていた。まだ収まらぬ息の下で、喜助が夜一の豊満な胸に顔を埋めたまま、申し訳なさそうにぼそりと呟いた。

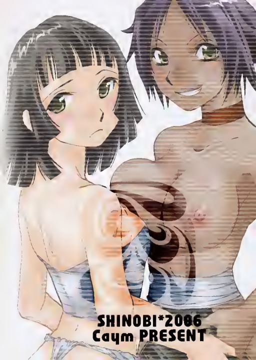
「サカリすぎました……」

夜一は、その余りに青臭い声色に、ため息を付き。

返答の代わりに、胸で戯れる白銀の髪を、思い切り掻き潰してやったのだった――。




君の名は
閣下は止せ堅苦しい
もっとくだけて呼んで良いぞ
夜一さんとか
それでは・夜一様と
お呼びしても・・・宜しいでしょうか?
わあああ
お堅いヤツじゃのう主らもそう思わんか?
カッ
はっ同意であります。夜一たん♥
・・・夜一たんっ
ソイたん
軍団長直属の護衛軍の実態は夜一タンファンクラブ


SHINOBI*2006
Caym PRESENT